



Title	日本語の非対格構文と θ 理論
Author(s)	西垣内, 泰介
Citation	大阪大学言語文化学. 1992, 1, p. 41-52
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/78199
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

日本語の非対格構文と θ 理論*

西垣内 泰介**

This article discusses syntactic and θ -theoretic properties of the nominatively-marked NP in the so-called unaccusative construction in Japanese. We offer two sets of facts indicating that the nominative NP in some unaccusative constructions has properties of the object, rather than the subject. These are based on (i) case-marker drop; and (ii) the distribution of arbitrary reference PRO. Then we see that the nominative NP denoting a human being has the θ -role of Agent as well as that of Theme. To accommodate this apparent violation of the θ -criterion, we hypothesize that Infl has the capability of assigning the θ -role of Agent to the subject argument in its projection. This analysis accounts for the subtle difference between Japanese and English in terms of the behavior of the so-called implicit agent. Finally, we consider the conceptual motivation for postulating a subject position in IP in the absence of a Case-theoretic motivation, and suggest that the present analysis offers a θ -theoretic motivation for having two potential positions in the phrase structure of Japanese.

1 日本語のいわゆる非対格構文

Miyagawa (1989) は日本語のいわゆる非対格構文の派生に NP 移動が関わっている旨の主張をしている。ここでいう非対格構文とは、概ね主格「が」でマークされる NP が Theme, すなわち述語が表す変化や移動などを被るもの、と定義できる意味関係、いわゆる θ 役割を担う構文、というように意味的に定義しておく。次のような文が非対格構文の例である。

*The Unaccusative Construction in Japanese and θ Theory (Taisuke NISHIGAUCHI)

** 言語文化研究科言語コミュニケーション論講座

本稿は大阪大学大学院言語文化研究科の授業「言語運用理論研究」でインフォーマルに講義した内容をまとめたものである。執筆にあたり、多くの個所で同授業参加者のコメントを参考にさせていただいた。郡司隆男氏の L^AT_EX の指導に感謝を表したい。

- (1) a. ドアが開いた
 b. お金が落ちている
 c. 戦争が起こった

これらの文に現れる動詞の多くは対応する他動詞を持っている。「開く」:「開ける」、「落ちる」:「落とす」、「起こる」:「起こす」などである。「行く」「来る」などは対応する他動詞は存在しないが、主格でマークされる項が Theme である、即ち移動するものであることから、非対格構文を引き起こす動詞と考えられる。一方、「働く」「踊る」などは、主格の項が行為者 Agent の θ 役割 (のみ) を持っており、非能格動詞 unergative verbs と呼ばれ、区別される。非能格動詞は純然たる自動詞である、ということができる。

Miyagawa の分析によると、「ドアが開いた」の「ドア」は D 構造では「開く」の目的語の位置に生成され、S 構造への派生の過程で主語の位置に移動される。

- (2) [] [_{VP} ドア 開く]



この移動を動機づけるのは、「開く」は「開ける」と異なり、統率する NP に対して格を与えることができないこと、即ちこの動詞の目的語は、D 構造の位置にとどまっていたら格を与えられず、「格フィルター」の違反になる、という格理論に基づく仮定である。VP の外側に移動すれば、主語の NP に主格を与えるメカニズムにより「ドア」は「格フィルター」をのがれることができる。他方、非能格構文は、D 構造から次のように主格の NP は VP の外側の主語の位置に生成され、NP の移動は関与しない。

- (3) [太郎 (が)] [_{VP} 働く]

このような分析の証拠として、Miyagawa は「遊離数量詞」Quantifier Float (QF) の現象を挙げている。QF を含む非対格構文 (4) は同じく主語からの QF を含む非能格構文 (5) に比べ、容認性が高い。

- (4) a. ドアがさっきこの鍵で5つあいた
 b. 学生が去年国家試験に5人うかった

- (5) a. ??学生が去年あの店で5人働いた
 b. ??男が昨夜あのディスコで5人踊った

ここで基礎となるのは、QF を受けた数量詞はそれと関連づけられる NP と相互に c 統御しなければならないという Saito (1985) の観察である。上の文ではいずれも数量詞が VP 内部にあると仮定すると、非対格構文では下のように S 構造で数量詞と相互に c 統御する位置に NP 移動の痕跡が存在し、この痕跡が数量詞と正しく関連づけられることが (4) の文法性を説明する。

- (6) [ドア_i (が) [_{VP} t_i 5つ 開いた]]

この分析は、関与する c 統御の定義の問題などを別にしても、多くの問題を含んでいる。その中で重要なのは、この分析はそれが証明するよう意図されていることを証明していないこと、即ちこの分析は日本語の非対格構文の派生に NP 移動が関与していることを証明しないということである。仮に (2) に示される派生が正しいとして、そこに関わる移動の操作が NP 移動であると言うためには、格理論、 θ 理論などに基づく動機付けが必要である。「開く」が目的語の位置の NP に目的格を与えないにしても、Takezawa (1987) が主張しているように格を与えない述語に統率されている NP が、そのままの位置で Infl によって主格を与えられる可能性があることなどを考えると、これは日本語の A 位置への移動全般に言えることだが、格理論に強い根拠を求めることは難しい¹⁾。

実際、日本語のいわゆる非対格構文の主格でマークされた NP は、主語ではなくてむしろ目的語の特性を持っている。これが正しいとすれば、この構文の主格 NP は、動詞に統率される位置にとどまっているか、あるいは (2) の派生が正しいとしてもそこに関わっているのは VP ないしは IP への付加、いわゆる「かきまぜ」Scrambling によるものであって、NP 移動ではないことになる。次節でこの点を考察する。

2 主格でマークされた目的語

Shibatani (1986) は次のような日本語の「二重主格」の構文および「にーが」の格パターンをとる構文の特性を検討している。

¹⁾この点については、4 節でもう一度論じる。

(7) a. 太郎が英語がうまい (こと)

b. 太郎に英語がわかる (こと)

これらの文の主格でマークされた「英語」が主語ではなく、むしろ目的語の特性を持っている根拠として、Shibatani は (i) 助詞の省略、(ii) ゼロ代名詞の分布に基づく 2 つの議論を提出している。以下、それらの議論に照らして日本語の非対格構文の主格 NP が目的語の特性を持っていることを見る。

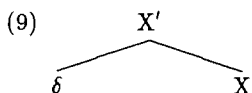
2.1 助詞の省略

Shibatani は Saito (1985) の、一般に目的語の「を」は、動詞が統率に基づいて与える「抽象格」(Saito の用語) であるという特性の反映として、主語の「が」に比べ省略されやすいという観察を引用し、(8) で主格「が」でマークされた「英語」の位置に現れる NP の格助詞は省略されやすいことを指摘している。

(8) a. 君、何語 (が) わかるの？

b. 君、何 (が) ほしいの？

このことは、助詞の省略に関わっているのが個別の助詞・格マーカの特性ではなく、語彙範疇による統率という構造的概念であることを示している。即ち、助詞の省略は次のような構造の δ の位置で起こるということである。



ついでながら、助詞「に」も、省略することが可能であることが、次の例によって示される。

(10) a. あの子、自転車 (に) 乗ってる

b. 君、どこ (に) 行ってたの？

「行く」は「へ」でマークされた表現も取りうるので、(10b) の「どこ」は「どこへ」の省略と思われるかも知れない。しかし、「歩く」などは「へ」でマークされた表現しか取れない (隣町へ／*に歩く) が、この場合助詞の省略は不可能である。

(11) 君、どこ*(へ) 歩いたの？

(11) は、無理に省略すると「どこを歩いたの」という解釈しかできない。

「行く」と「歩く」の違いは、前者が目的地を表す表現を強く要求するのに対し、後者はそのような要求が強くないことである。

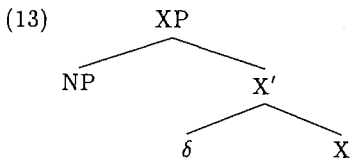
以上の考察から、助詞の省略の条件には特定の格助詞が関与するのではなく、(i) 格を付与する語彙範疇に統率され、(ii) かつ隣接しており (Saito (1985))、(iii) しかもその語彙範疇の強い意味選択 (s-selection) を受ける、という文法構造と意味構造 (θ 構造) の両面に言及することが必要である。

話を非対格構文に戻そう。次の例が示すように、非対格構文の主格 NP は省略が可能である。

(12) a. あ、ドア (が) あいた！

b. あそこ、何 (が) 落ちてるか見て来て

これらの文の文法性は、上の助詞の省略に関する仮定が正しいとすれば、日本語の非対格構文が次のような構造を持っており、主格の NP が θ の位置に少なくともも存在しうることを示唆している。



従って、XP に直接支配される NP 即ち本来の主語の位置は X' 理論の要求のみによって存在し、この位置を θ 役割を持った要素が埋める必要はない。日本語の「虚辞」*expletive* に相当するものと考ええる。

一方、D 構造で主格 NP に相当するものが主語の位置に生成され则认为られる非能格構文では、主格マーカーの省略は、完全な非文法性を引き起こすわけではないが、容認性が低くなる。

(14) あそこで誰 ??(が) 働いて／しゃべってたか覚えてる？

助詞の省略の問題は方言などの要素もあり、最後の (14) の判断には様々な反応があると思われるが、(12) との比較では、劣るのではないかと考える²⁾。

2.2 ゼロ代名詞の分布

Kuroda (1983) は主語の位置のゼロ代名詞は任意、あるいは総称的な指示を持ち得るのに対し、非主語の位置のそれは特定の指示しか持てない旨の観察をしている。

- (15) a. __ 本を読むのはいいことだ
b. こどもが __ 批判するのはよくない

(15a) ではゼロ代名詞が人一般を指すことができるが、(15b) では特定の指示を持つことが必要で、「こどもが人々(おとなたち)を批判するのは..」という解釈はできない。

Shibatani は「にーが」パターンの主格 NP および二重主格文の二番目の主格 NP の位置は、ゼロ代名詞の分布に関して主語の特性を持っていないことを示している。

- (16) a. 太郎に __ 信じられないのは当然だ
b. 君が __ 好きなのはよいことだ

これらの文はいずれもゼロ代名詞を「人々」、「人一般」などと解釈することを許さない。この点において、問題の主格の NP は主語ではなく目的語と同様にふるまうのである。

Shibatani はこのようなゼロ代名詞の分布を統率に基づいて捉えている。即ち、任意的、総称的な指示を持つゼロ代名詞は語彙要素による統率を受けない位置にしか現れることができない、という一般化である。(16) のゼロ代名詞はいずれも目的語の位置にあり、述部のヘッドによる統率を受けるため、任意的、総称的な指示を持つ、いわゆる PRO としては起こり得ないということである。

²宮田 (1992) は日本語を母語とする幼児の発話データを考察し、幼児の日本語でも助詞が省略されるのは目的語の「を」、状態述語の目的語の「が」、非対格構文の主格「が」が圧倒的であり、純然たる主語の「が」が省略されているケースは非常に少ないことを示している。さらに、一般に助詞の省略は関西方言で頻繁に起こり、条件も他の方言に比べゆるやかであると考えられているようだが、宮田が示すデータからは、そのような有意義な差異は見られない。

このような視点から次のような文を考えてみると、非対格構文の主格 NP は主語としての特性よりもむしろ目的語のそれに近いものを持っていることがわかる。

(17) ああいう場所で／に __ 倒れる／落ちる のはみじめだ

このような文で、ゼロ代名詞を任意的、総称的に解釈することはできない。このことは日本語の非対格構文の主格でマークされた NP は語彙範疇の要素によって統率を受けていることを示しており、前節で仮定した構造 (13) の正しさを支持している³⁾。

3 「行為者」の解釈

Miyagawa の定義に従った日本語の非対格構文の中には前節で観察したものと異なった振る舞いをするもののがかなりある。ゼロ代名詞の分布を見ても、次のような非対格構文では任意的、総称的な解釈が可能である。

(18) a. __ あの試験にうかるのは難しい

b. __ 今から3時間で空港に着くのは無理だ

「うかる」「着く」などは意味的に非対格動詞の資格を持っていると思われるが、これらの文でゼロ代名詞は「人々、誰でも」などの解釈ができる。同じ非対格動詞を含んでいるにもかかわらず、(18) と (17) の間に解釈の違いが見られるのは、どういう理由があるのだろうか。一つ考えられるのは、(18) では表現されている意味内容が意図的な動作を表している、ということである。言い換えると、(18) のゼロ代名詞は Agent「行為者」の θ 役割を持っていると考えられる。しかし、我々は上で非対格構文を主格で表される項が Theme の θ 役割をもつものと意味的に定義した。Agent の他の θ 役割との質的な相違については従来から指摘があるものの⁴⁾ この構文の主格 NP が Theme と Agent の2つの θ 役割を担っているという、少なくとも一見して θ 基準に違反している状況をどのように考えればよいのか。

³⁾ 例文 (17) の解釈は、最初私が考えていたほどはっきりしないのが事実のようである。それは、一方でゼロ代名詞の任意的・総称的解釈が「人」を指さなければならないのに、人間を(意味の上で)主格にとる文を作ると、どうしても「行為者」の解釈を持ち、次の節で考察する要因が入り込んでしまうためである。

⁴⁾ Nishigauchi (1984) など。

この問題を考える前に、日本語と英語の「行為者」Agent の解釈に見られる差異について指摘したい。これは、私の知る限り従来注目されたことのない二つの言語に見られる微妙な差異である。

次の英語の受け身文で、不定詞の意味上の主語となるのは、sink の行為者と同じである。明示されていない行為者であることから、implicit agent 含意的行為者と呼ばれている。

(19) The boat was sunk ___ to collect the insurance.

次のような、受け身の主語が潜在的には行為者であり得るような人間が主語になっても、事情は同じである。

(20) The President was assassinated ___ to prove a point.

この文でも、不定詞の意味上の主語は the President ではなく、「暗殺者」である。

一方、日本語でも、次のような文では英語と同じことが言える。

(21) 豪華なヨットが ___ 保険金を稼ぐために 沈められた

この文で保険金を稼ぐよう意図したのは、ヨットを沈めた行為者である。しかし、次のような受け身文では、英語の (20) と際立った違いが観察される。

(22) その政治家が ___ 国を守るために 暗殺された (ことは語り継がれている)

この文で国を守るように意図したのは、暗殺者でもありうるし、暗殺された政治家でもありうる。この、後者の読みは英語の相当する構文には見られない解釈であり、これは日本語と英語の間のなにか重要な相違点から派生している現象と考えられる。もう少し観察を続けよう。Roeper (1987) などが指摘しているように、英語の非対格構文では、含意的行為者が存在しないため、行為者によるコントロールを要求する目的節を伴って現れることはできない。

(23) *The boat sank ___ to collect the insurance.

この点については日本語の非対格構文でも同じことが言える。

(24) *豪華なヨットが ___ 保険金を稼ぐために 沈んだ

一方、英語では次のように、潜在的には行為者になり得る人間が主語の middle construction「中間(態)構文」でも、主語は目的節の主語位置をコントロールする資格を持ってない。

(25) *Bureaucrats bribe easily ___ to prove a point.

この点で日本語の非対格構文は英語と違っており、主格の NP は目的節の意味上の主語と解釈され得るのである。

(26) 太郎が ___ 何かを証明するために 阪大の入試に落ちた(こと)

次の節で、この日本語の特徴的な現象が文法構造から派生するものである可能性を考察する。

4 「行為者」と Infl

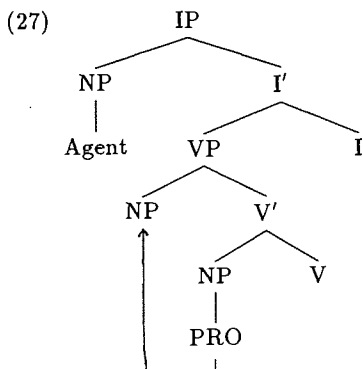
日本語の非対格構文の主格 NP は、特に人間を指す場合、非対格動詞で表される動作、変化などの Theme であり、かつ行為者 Agent でもあり得ることを観察した。この一見して θ 基準に違反すると思われる状況をどのように捉えるかを考えたい。

V のような単一の要素がある NP に対して Theme と Agent の θ 役割を付与することは θ 基準の違反であるが、実は関与している NP は 2 つあってそれらがそれぞれ別々の要素から θ 役割を与えられているとすれば、なんら概念的な問題はない。仮に関与する NP の一つは V から Theme を付与されるが、もう一つは別の要素から Agent を与えられると考えよう。

この、もう一つの θ 役割を付与する要素が Infl であると仮定する。Infl の投射内に現れる NP は Agent という θ 役割を持っているのだから、もう一つの、V の投射内に現れる NP は独自の θ 役割を持った要素でなければならない。この要素は、必ず Infl の投射内の Agent による束縛を受けなければならない点で照応詞 anaphor の性質を持っており、 θ 役割に関しては独立しているという点で(空要素としては)代名詞的な性質を持っている。すなわち、この要素は束縛理論に関して照応形の束縛条件 A と代名詞の束縛条件 B を同時に満たさねばならない、統率領域を持つことができない要素であり、従って統率を受けない位置に現れなければならない、いわゆる PRO である。

この分析は非対格構文での NP の移動に、従来の格理論とは異なった動機付けを与える。もし D 構造で非対格動詞に統率される位置に生成される NP が PRO であれば、この要素は S 構造で統率をのがれる位置に移動する必要がある。この統率を受けない位置として可能なのは、VP 内の主語の位置である。

ここまでの考察をまとめると、日本語の非対格構文で主格の NP として潜在的に「行為者」でありうる人間などを含むものは、次のような構造と派生を持つことになる。



PRO の統率に関与する構造的條件は、ここでは D 構造での語彙的要素による c 統御を受ける位置は統率位置である、と定義する。D 構造の位置が関与すると考えるのは、S 構造への派生の過程でヘッド移動が起こると、VP 内の全ての位置が統率位置になる可能性があることに基づいている。しかし、V が I の位置に付加された場合の関与する統率子は I であるとすれば、VP に直接支配される位置の語彙要素による統率は成立しないので、当面の構造では、D 構造の.. という規定は不要である。ここで強調しておく必要があるのは、VP に直接支配される位置は束縛理論に関して統率を受けないのであって、他の考察、例えば格付与などに関して統率を受けている場合を許さなければならない。後者の場合、機能範疇による統率も関与するのだから。なお、日本語の統率に関与する構造的関係は「枝わかれ」に基づく c 統御であって「最大投射」に基づく m 統御でないことについては、Fukui and Nishigauchi (1992) 参照。

InfI が主語に対して θ 役割を与える旨の主張は、Diesing (1990) によって独立

した根拠でなされている。但し、英語でこのような文法構造と θ 構造の対応を仮定することは (25) の非文法性などを考えると問題がある。英語でも Infl の投射内の主語が Agent でありうるのなら、なぜその主語が目的節の主語位置をコントロールしないのか、という問題がおこるのである。Infl が主語に対して θ 役割を与えるのは、英語には見られない日本語 (タイプの言語) の特徴と考えるべきである。とすると、この2つの言語がなぜこのような相違を見せるのかという問題を考えなければならない。

Fukui and Nishigauchi (1992) の枠組みが正しいとすれば、日本語では VP の内部に留まっている NP が主格を付与されることも可能である。これは主格の付与が「一致」に依存している英語と異なり、日本語では主格の付与が統率に基づくと考えられる仮説 (Koopman and Sportiche (1990)) の一つの帰結である。言い換えると、日本語では NP が VP 内の位置をとるか IP 内に現れるかの選択は格付与という文法的 (統語的) 考察によっては決められないのである。

主格 NP が IP 内に現れることの動機が文法的考察に求められないにも関わらず IP 内に現れることがあると考える根拠がある (Nishigauchi and Uchibori (1992)) とすれば、その動機付けが意味的考察の中に求められることは一つの合理的な選択肢である。Nishigauchi and Uchibori (1992) は日本語の VP 内の主語と IP 内の主語の位置の違いが「裸の」NP の数量的解釈の違いに反映していることを主張しているが、本論の考察は主格の NP が IP 内にも現れる可能性に θ 理論的な動機付けを提示したことになる。

5 最後に

本論では、まず日本語の非対格構文の主格でマークされた Theme の θ 役割を持つ NP は、S 構造でも非対格動詞に統率される位置、即ち目的語の位置にとどまっている可能性があることを示し、その根拠として助詞の省略の現象とゼロ代名詞の分布について考察した。次に、この構文の主格 NP が「行為者」の θ 役割をもつ場合があることを観察し、そのような構文を捉えるために Infl が θ 役割を与え、VP 内で PRO の移動が起こる旨の分析を提案した。

この分析の理論的帰結の一つは、日本語の NP 移動は格理論に基づく考察に動機付けを求めることは妥当ではなく、むしろ θ 理論的考察と束縛理論から PRO の存在が導かれ、PRO が統率を受けない位置へ移動することが従来 NP 移動と思

われてきたものに他ならないことを示したことであった。この分析は単に日本語の非対格構文にとどまらず、A 位置への移動と考えられてきた現象に関わっている。Nishigauchi (1992) は日本語の(直接)受け身構文に A 位置への移動が関わっており、その移動は、 θ 領域に基づく subadjacency「下接条件」に従っている旨の主張をしている。受け身構文に見られる移動も、実は PRO 移動なのである。

参考文献

- Diesing, M. (1990). *The Syntactic Roots of Semantic Partition*. Ph.D. dissertation, University of Massachusetts, Amherst.
- Fukui, N. and Nishigauchi, T. (1992). Head-movement and case-marking. Ms, University of California, Irvine and Osaka University.
- Koopman, H. and Sportiche, D. (1990). Subjects. Ms. University of California, Los Angeles.
- Kuroda, S.-Y. (1983). "What can Japanese say about government and binding?" *West Coast Conference on Formal Linguistics*, 2.
- Miyagawa, S. (1989). *Structure and Case Marking in Japanese*, Vol. 22 of *Syntax and Semantics*. Academic Press, New York.
- Nishigauchi, T. and Uchibori, A. (1992). Japanese bare NPs and syntax-semantics correspondences. Ms. Osaka University.
- Nishigauchi, T. (1984). "Control and the thematic domain". *Language*, 60, 215-250.
- Nishigauchi, T. (1992). Long distance passive. To appear in a volume on comparative syntax to be published from Kuroshio, Tokyo.
- Roeper, T. (1987). "Implicit arguments and the head-complement relation". *Linguistic Inquiry*, 18, 267-310.
- Saito, M. (1985). *Some Asymmetries in Japanese and their Theoretical Consequences*. Ph.D. dissertation, MIT, Cambridge.
- Shibatani, M. (1986). On the transitivity of the stative predicate. *Working Papers from the First SDF Workshop in Japanese Syntax*. University of California, San Diego.
- Takezawa, K. (1987). *A Configurational Approach to Case-marking in Japanese*. Ph.D. dissertation, University of Washington.
- 宮田裕子 (1992). 日本語格助詞の習得—「が」「を」を中心として—. 修士論文, 大阪大学言語文化研究科